## 奈良・薬師寺

1 所在地　奈良県奈良市西の京町字東堂
2 調査期間　一九六四（昭39）年一月～二月
3 発掘機関　奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
4 調査担当者　榧本亀次郎
5 遺跡の種類　寺院跡
6 遺跡の年代　八世紀～中世
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

発掘調査は薬師寺境内、字東堂で宝蔵殿の建設にともなって行われた。調査面積は、約四〇〇m²である。検出した遺構は、掘立柱建物、井戸一基、土壙数ヶ所で、いずれも一三～四世紀のものと思われる。木簡は発掘区中央付近で検出した土壙から一点出土している。同土壙の埋土は上下二層にわかれるが、木簡は下層から木片、瓦器等とともに出土した。

8 木簡の釈文・内容

□　(12)×(6)×2　081

墨痕は扁のみしかのこっておらず、また扁も判読できない。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告』　一九八一年予定（鬼頭清明）

### 金堂の仏前に木簡あり

奈良・平安時代に木簡が使用されていたことは、文献史料にも記されていることは、つとによく知られているが、大江親通『七大寺巡礼私記』にもその一例が記されている。

その一つは、東大寺大仏殿の仏前にあったとされる「縁起文板」で、「長三尺三寸　広七寸」とされ、その名称からみて板に『大仏殿碑文』を記したものらしい。また大安寺の金堂の仏前、つまり本尊の前にも「縁起簡板」といわれるものがあって東大寺と同じように、おそらく『大安寺碑文』や『大安寺資財帳』にみえるような縁起文が記されていたと思われる。この方は、「長四尺六寸　弘二尺余」とあって、東大寺のものより二倍ほど大きい。東大寺の方は「仏前右方之柱下」にあって障子のように立てあったという。だとすると、どちらも板をたてに使用して縁起文を記したもので、長大な木簡のように思われる。現在平城宮跡などで出土している木簡は長さ一尺前後のものが多く、二尺をこえるものは少い。このような例からすると、寺院の金堂仏前にはその寺の縁起文を記した長大な木簡があったことになり、もし発掘調査でみつかればさぞ興味深いものであろう。

（K・K）